

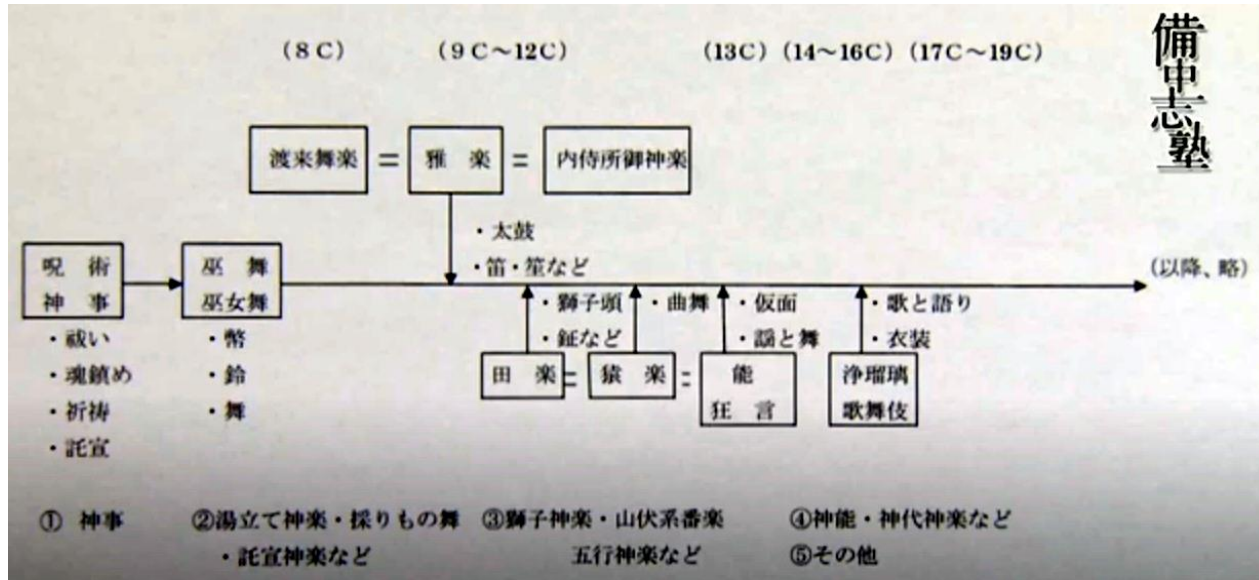
# 備中神楽と温羅

民族学者：神崎 宣武 氏

平成28年10月25日 備中志塾から抜粋

## 神楽はもともと芸能ではない

村ができたとき疫病、飢饉、天災があるとこれは神の怒りだ。神を鎮める。穢れがある。神を鎮める為にお祓いをして穢れを除く。今後の無事を祈るご祈祷をする。ご祈祷の願いが届けられたかを確認する為、神のお告げを聞く。呪術的なシャーマニズムである。



いつ始まったかは不明であるが、自然を相手に暮らしていると、科学的な発想は未発達な時代に呪術的な神信仰があらわれる。

そこで具現化していくことが神楽の始まりである。

呪術師は靈感の強い女性（シャーマン）、神主が行い。身を清めて、ご祈祷して神がかりのことをする。

ところで神楽とは、神楽しむは当て字であり、民俗学的には、神座（かみくら）であり、神がお座りになっている場所全てを示し、そこでの行い全てを神楽としての語源としている。

そこでは、御幣、鈴、榊が小道具（取りもの：神が寄り付くもの）であり、それらを使った呪術的な神楽であった。

その後、大陸から渡来舞踊、渡来歌謡が伝来しました。これは、雅楽、御神楽として観られる。民間に伝来したのは田楽に観られる。田植え所作だけでなく、お囃子、踊りが神楽の中に取り入れられた。

次に能、狂言が影響する。特に大きな影響は面である。

面があると、素面以外にもう一つの役ができる。

更に、歌舞伎があらわれると、見栄を張る、荒っぽい所作がでる。

呪術的な神楽が中世、近世にかけて芸能化してくる。

備中神楽でいえば、本来神事的な神楽が多く残っている。

榊舞、役差し舞、白蓋神事、剣舞、託宣、五行神楽

は芸能化する前（1800年以前）からの神楽であろう。

江戸時代なかごろから西橋国橋が京都で流行っている芸能を取り入れている。

備中神楽は神事的な神楽と演劇要素を取り込んだ複合的なところが特徴である。

他地域での神楽では、神事的な神楽は除かれて、芸能的な神楽となっている。

呪術的な神楽がよく残ったと感心しています。

## 吉備津について

作者不明であるが西林国橋系列の方の作品であろうと考えられています。

また、吉備津は他の地域では演じられない。

備中神楽のみの演目で、備中人が誇るべき作品です。

吉備津の背景として古墳時代に多くの豪族がいて、その連合体として吉備の国があり

（4～5世紀）、その中のある豪族（岩山明神）が納める土地で一人の男（温羅冠者）

が暴れており、その成敗を大和朝廷に委ねて、吉備津彦が派遣された。岩山明神の娘

内宮姫が戦術を授ける。内宮姫はシャーマン（呪術的な靈感を持つ女性）である。

## 吉備津を観終えて

吉備宮縁起（吉備神話）によれば、温羅冠者は、一丈四尺の身の丈、髭毛髪がぼうぼう、目がぼうずきの様に輝き、口が裂けて、恐ろしい風貌。

楊力に優れており、沖行く舟を襲う。

備中神楽では、温羅が降参して、家系図を渡して、温羅冠者は此の代で途絶えることを宣言しています。殺生は行わない。

吉備宮縁起（吉備神話）では、温羅冠者は、退治されて後、首は刎ねられる。

その首を土の中に埋められ、唸り続ける。吉備津彦の夢枕に温羅冠者が現れて、

「われを丑寅御崎に祀れ、」といわれる。

丑寅は、鬼門であり、温羅冠者はそこを守護するから祀れといわれる。

日本の神話の特徴として「悪いものが成敗されてもその後、神となり祀られる。」といった

民俗学でいう「両義性」が保たれているといえる。人は善も悪も両方の性格があるが、

そのいい性格がでるように計る。悪いものを徹底して悪くしない。協調すれば、

神さまとして祀る。といった日本人の精神的な匠な創作である。

備中神楽の国譲りの演目でも観られます。